福田美紗子「お別れ会」式辞　二〇一四年九月二十七日

福田美紗子さんと最後にお目にかかったのは、去る七月十六日の午後でした。病状が既に深刻だと伺って参上したので、さぞやつれておいでだろうと想像していましたが、自宅のベッドに横たわる美紗子さんは思ったよりずっとごきげんよく、晴れやかなお顔で、にこやかに会っていただけて、とてもうれしく存じました。

その時交わした会話の内容は、後刻ちょうだいした彼女のノート「主の恵み」に記された七月六日付の「秀雄様あての最後の記録」と全く同趣旨で（資料「病歴」）、ただ感謝、感謝あるのみですと繰り返されました。見舞った私どもはかえって豊かに見舞われて尊い経験をしたのです。

私ども、私と妻富子は、彼女の手を握り、福田さん、ご息女方もご一緒に祈りを共にして別れたのですが、私は彼女とお互いに目と目を合わせてじっと見つめ合った時、美紗子さんは実に「ハプルース」の人だなと感にたえぬ思いがしたのでした。

いま私はこの「お別れの会」で式辞を申し述べるべくここに立っているのですが、私などより美紗子さんをよくお知りの方がほかに大勢おいででしょうに、なぜ私がと恐縮しています。これは美紗子さんご本人のご意向だからというので謹んでお受けしたのですが、なぜ彼女がそう言われたのかと考えてみますと、彼女と私の間の一つの接点に思い当たります。この接点をほかにして、私は福田美紗子さんを語ることはできません。

資料「信仰歴」段落２をごらん下さい。ここに山本泰次郎先生とあるのは、内村先生の晩年同先生に師事したキリスト教独立伝道者で、福田さん方、私ども共通の信仰の恩師です。その頃（一九五〇年代後半）、私どもはアメリカ人宣教師の伝道によってキリスト信者になった若者たちが、同先生からキリストの福音の真理について同先生から一層深くかつ確信的に教えられて、更なる闡明に心躍らせ、謂わば「山本スクール」とも呼ぶ

べき仲間をつくって聖書の勉強に励んでおりました。

２の段落の最後の行に「武藤陽一主宰の〝テコア聖書集会〟に出席することになった」とありますが、この山本スクールの一つの結実である集いの出発が一九五六年九月のことで、美紗子さんはそれから秀雄さんとのご結婚（五八年十一月）までまる二年程の間集会を共にされました仲間であり、そうした次第で彼女は特にこの集会の出発に当たり、山本先生がして下さった開講講演「キリスト教はどのようにして始まったか」という奪魂的講演を共に拝聴した同門、同労、主にある友情に結ばれた信仰の旧友なのであります。

では、この講演で山本先生は私どもに何を教えて下さったか。美紗子さんはその中心をしっかりと把握して、その二十年後、私どもの「文集」への寄稿文の中で、こう言っておられます（資料「二十年の感謝」）。「山本先生はペンテコステの日に弟子達に直接聖霊が降った事、そしてその聖霊は弟子達の中に〝どっかと腰をすえてしまった事〟（使徒行伝二・３「一人一人の上にとどまった」という句のギリシャ原語による先生の独創的解釈）を話して下さいました。此の時弟子達に降った同じ聖霊が二千年後の今、教会に依らず儀式によらず、神より直接私どもの上に降り、そして私共の中にどっかと腰をすえて此の二十年間導き働き給うたが故に現在ある自分を感謝せざるを得ません。十字架の福音を明らかにせられ、そして二十年間ただひたすらその福音を信じ続けて生きてこられたことは、ただただ恵みという他ありません。これは自分で考え自分で選び取った道ではありません。良き師を与えられ、真の福音を聞く機会を与えられたが故の恵に他ありません。ただ感謝、感謝あるのみです」

この時から更に四十年、この間私どもは互いにそう繁く往き来があったわけではありません。用件があって会って話し合うこと、電話で話し合うこともなかったわけではありませんが、やはり手紙のやりとり（文通）によって文字通りコレスポンデンス（愛の反応）し合うのが一番心を通わせる道であったようです。福田さん方は毎年必ず年末年始のご挨拶を送って下さるのですが、昨年末の、従って美紗子さんの最後の便りとなった次

のようなものでした。「何よりも若き日に良き師を与えられ、福音の喜びを教えられました恵みははかり知れません。今日まで導かれて歩んで来られました事を感謝するとともに、信仰の友たちとの変わらざるお交わりを深く感謝して居ります」

これらの言葉は彼女の信仰告白と言うことのできるもので、彼女に出会って六十年、彼女の便りは一貫していつも少しも変わるところがありませんでした。彼女の信仰、彼女のキリスト信者としての生き方には若い日から終わりの日に至るまで少しも変わるところがありませんでした。話の冒頭に私が美紗子さんを「ハプルース」の人と申したのは、このことです。この語はマタイ伝六・2「体のともしびは目である。目が澄んでいれば、全身が明るいが、濁っていれば全身が暗い」の中の〝澄んで〟と訳された語ですが、この訳語はいささか情緒的で、言そのものの意味は〝目が真直ぐ目的に向いている、むしろ健全な、純一な、一途な〟という意味の語です。美紗子さんこそ正にハプルースな人、ただ主イエス・キリストのみにしっかりと目を向けて生きた〝心一途な〟方でした。その純一ゆえに〝全身が明るく〟、今日もこのように多くの皆様に感謝と喜びをもって見送られる明るい人でした。

ところで、山本先生は先の講演での中で、聖霊にどっかと腰をすえてとどまっていただく生を〝キリストの生命に生きる〟とも表現されて、これをキリスト信者にとっての根本問題とし、「この問題を解決すれば、あと（どう伝道するか、教会をどうするか、社会問題などをどう考えるか、など）の問題は自然に、誰にでも解決しようと思えばできますし、別に解決しなくともすむのです。しかし、このように根本問題だけで生きていくことはなかなか困難なことです。もし私どもが選ばれてそういう立場に立たされ、そういう生き方をしなければならぬような信仰を与えられたら本当に感謝してよろしいのです」そして更に「この道は困難の多い歩くに決してやさしい道ではありません。しかしながら歩き甲斐のある道です。今後皆様が二十年三十年この道をお歩きになってごらんになれば、たぶん私が今日申しあげたことをご諒解願えると思います」と言われました。

山本スクールに身を置いた人間は、みなそれぞれに異なった人生を生きてきました。しかし先生が示して下さった「自由」のゆえに、多かれ少なかれこのような道を歩いてきて、この先生の言葉を感謝をもって諒承しているのですが、福田美紗子さんもまた、彼女こそ生涯をかけて独立伝道者である夫君の確かなパートナー（創世記二・８向き合う者・助ける者」として生きぬかれたのでした（資料「信仰歴」中央参照）。そして彼女の信仰を、ご夫君は、コリント一、二・２のパウロの言葉を引いて、「キリストの十字架のみの信仰」と言われ、美紗子ご自身は、本日のプログラムのために前もって三つの讃美歌と一つの聖句を選んでおかれました。讃美歌五一八、二四九、八七は皆さんで歌いますので、聖句はいま読みたいと存じます。（「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは律法の実行ではなく、キリストの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです」（ガラテヤ二・１６））。

この信仰の尊さと恵みは、美紗子さんが八月二八日に主の御許に召された時に鮮やかに示されました。病気のために長い苦しみのあとであったにもかかわらず、その顔は「美しい天子の顔であった」とご夫君は証言し、ご親族で営まれた火葬・告別式の際には次の内村鑑三の文章が読まれたということでした（資料「式次第」）。

訃報をいただいて、去る九月三日に福田さんを問安しました。ご息女方も加えて昼食をいただきながら、時の経つのも忘れて語り合い、美紗子さんを偲びました。

その折、病床のお母様の様子について、旨子さんでしたか共子さんでしたかが、ささやくようにこう言って、お互いにうなずき合っていらっしゃいました「かわいかったわね」と。愛するお母様をその最後まで懸命に看取られた（そのお一人は専門職の看護師として）娘さん方の尊敬する母への愛情に満ちた観察に、私は深く感動させられたのでした。

美紗子さんは独立伝道者の妻として「生涯をかけて夫の伝道を助け」、三人の子供さん方の母として良き家

庭を築き、多くの友人たちと広く交わり、豊かな人生をしっかりと生きられた、そしてその最後に当ってはここ（式次第）にあるような立派な「最後のメッセージ（皆様への挨拶状）」まで準備された、その世にいう「しっかり者」（それは与えられた「しっかり」であるからこそ）キリスト者としても一人の人間としてもその一途さゆえに、間然するところのないしっかり者の美紗子を今や主イエスが「ご自分のところへと招かれた」（マタイ一九・13～15）彼の愛でてやまない「かわいい」幼な子となって、その父なる神のふところに抱かれ、「死も病も、悲しみも嘆きも労苦もない」（黙示録二一・4）天の休息に入れられたのだと信じ、私は深い慰めと確かな平安と力強い信仰の励ましとに満たされ心から感謝するものです。

私どもはここに彼女が言ってくれたように「必ずまたお目にかかれる約束と希望」を、その喜びをもって彼女と「お別れ」し、彼女を主の許へお送りしたいと存じます。

なおしばし、この朽ちるものをまとって地上に在る私ども、彼女に愛され彼女を愛してここに集った者、格別に悲しみの中にある福田さんとそのご家族の皆様の上に、天父の御慰めの一層に豊かでありますように祈って、私の式辞を終ります。